

学生の思考を変える共通教育（一般教養）の授業とは？

—— その2 授業で心のバリアを減少させる試み ——

長尾 秀夫

愛媛大学 教育学部

How to promote critical thinking of students on the lecture of liberal education

—— Part 2: a try to decrease psychological barrier on the lecture ——

Hideo NAGAO

Faculty of Education, Ehime University

はじめに

一般教養、教養教育の目的は、日本学術会議の提言「21世紀の教養と教養教育」¹⁾によれば、学問知、技法知、実践知の3つと市民的教養が核となるものであると述べている。一部を抜粋すると、学問知は社会を分析的・批判的に検討・考察すると同時に諸問題を自分に関する問題として自分の生き方や考え方を自省する知である、実践知は、日常の様々な場面で自分の在り方・生き方・振舞い方を自省して調整してゆく知であると述べている。また市民的教養は、社会的公共性の立場から環境問題、種々の障害を抱える人が直面している困難などの問題を自分たちの問題として捉えて、その解釈・改善の活動に参加し協働していくことと述べている。

これらの観点から心のバリアフリーの授業では、受講生がバリアを自らの問題として理解し、改善に向けて参加・協働する機会を提供した。バリアは障害がある人自身の問題ではなく、その人と関わる人や広義の環境の問題の結果生じるものである。障害者対策の政策²⁾ではバリア（障壁）には、①物理的なバリア、②制度的なバリア、③文化・情報面のバリア、④意識上のバリア（心のバリア）の4つがある。4番目の意識上のバリアがこの授業の対象となるのである。心のバリアには、心ない言葉や視線、障害者を庇護されるべき存在としてとらえるなどの例が挙げられている。これは障害（者）の理解ができていない、未経験なことに会ったときの反応でもある。

本授業では心のバリアを受講生が体験的に理解できること、心のバリアは誰しも体験していることを伝えるために、初対面の人との出会いで感じる緊張、それへの対応を通して、障害のある人に初めて関わるときの意識上のバリア、その対応、すなわちバリアフリー、について共感的理解を促したいと考えた。障害を特別なものではなく正常と連続したものと考えれば、初対面の気持ちは初めて障害者に会ったときの気持ちに近いもの、意識上のバリアに似たものが生じるであろうと考えた。

筆者は、心のバリアフリーに関して、受講生が自分の生き方や考え方を自省する学問知を育てる目的で授業方法について様々な試みを行っている。その一つとして、昨年度は省察的思考力を育てるためには授業中に毎回レポート作成をさせることが有効であることを報告した³⁾。

今回、新たな研究として、授業中のグループ討論で毎回席替えを行い、学生に心のバリアを体験させて、それに対処する機会を設けた。その結果、学生の心に生じた気持ちの変化を最終テストで問い、それについて分析した。もう一つの研究として、前回の研究結果の追試を行った。

対 象

対象学生は、共通教育の授業「こころのバリアフリー」の受講生で、大学生108人、高校生10人、合計118人である。性別について大学生は男性34人、女性74人、高校生は全員女性であった。大学生の所属学部は医学部医学科36人、看

護学科23人, 法文学部40人, 教育学部2人, 理学部2人, 工学部5人で, この中に5人の留学生がいた。在学期間は1回生が66人, 2回生33人, 3回生6人, 4回生3人で, 高校生は全員3年生であった。

方 法

共通教育の前期授業「こころのバリアフリー」は3人の教員によるオムニバス授業で, 第6回から第10回までの5回分を筆者が担当し, その授業について分析した。授業の流れの概要を図1に示す。

授業の時間配分は最初の30~40分は自由席で全体に対する講義, 次に課題に対するレポートを作成した後で指示した座席に移動しグループ討論を行うこと40~50分, 最後にグループ代表者による意見発表, 又は板書等10~20分であった。レポート用紙は教室入室時に授業の資料と共に配布し, 授業中の討論などをメモすることを求め, 授業終了時に回収した。筆者が担当する第1回の授業で成績評価はレポートと最終テストで行うことを伝えた。

グループ討論をスムーズに進めるために, 討論の前に課題について自分の意見をレポート用紙にまとめる時間をとり, そのレポート用紙を持って座席移動した。1グループの人数は3~4人とし, できるだけ速くにいる人, 日頃は話すことがない人とグループになるように筆者が指示した。そして, 各自の意見を一通り発表した後で, 討論をすることとした。また, 第1回の討論に当たっては, 座席移動後にグループ内でペアを作ってレポート用紙を交換し, 裏にお互いの似顔絵を筆者の指示に合わせて描いた。

成績評価はレポート得点20点, 最終テスト80点で採点し

<p>第1回の授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の計画を説明 ・授業中に席替えをして討論すること, その目的を伝える ・レポート(上半分)「今, あなたはこころのバリアフリーについてどのように考えていますか? 5行程度で書いてください」 ・レポート(下半分)「(レモンのおもちゃ)これを見て, 具体的に表現してください」 ・板書した位置に席替えを指示する。4人のグループを指定する。 ・向き合った人とレポート用紙を交換し, 教員の指示にしたがって裏に相手の似顔絵を描く ・グループで自己紹介をしてレモンについてお互いの表現を紹介する ・4グループを指定してグループの代表者が一例を紹介する ・本日の講義「4つのバリア」についてプリントとスライドで話す <p>第2回の授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回のレポートのコメント ・新しいグループを指定して席替えする ・プリント「こころのバリアフリー宣言」のキーワードを抜いたものを配布して, グループでキーワードを作ってもらう ・グループで考えたキーワードを板書して発表する ・講義「こころのバリアフリー宣言」についてスライドで解説する <p>第3, 4回の授業の展開は第2回とほぼ同様</p> <p>第5回の授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回のレポートのコメント ・前回のテーマ「障害の受容過程」の分析結果をグループ毎に板書して, 全体討論で発表する ・講義「障害の受容過程」の分析について一例をスライドで示す ・後半は最終テスト
--

図1. 授業の流れ

た。最終テストは授業中に解説し, 資料も配布した内容について問題1~3まで出し, 「記憶問題」とした。問題4は, 「今, あなたはこころのバリアフリーについてどのように考えていますか? 最近5回の授業内容を入れて7~10行で書きなさい」として, 受講生が授業内容を考慮して表現することを求めた。比較のために, 第1回の授業で「今, あなたはこころのバリアフリーについてどのように考えていますか? 5行程度で書いてください」というレポートを書いていた。これら2つのレポートを比較して, 授業内容を引用して新たな自分の考えを表現していることを評価した。これは授業内容を引用して答える問題なので, 以下は「引用問題」と表現する。

問題5は「授業中に席を替わることで, どのような心の変化が生じ, どのように対処することを心がけましたか? 5行以内で書いてください」として, 座席移動で知らない人とグループを作るストレス, それに対する対処法について質問し, 小さな心のバリアとそれへの対応(バリアフリー)の体験について書いてもらった。

結果の分析について, 配点はレポート20点, 「記憶問題」3問の合計60点, 「引用問題」20点で総得点100点とし, それぞれの得点の相関係数, 性別や在学期間に対応のないt検定を Stat View5.0で行った。

結 果

研究1. 座席移動によるグループ討論の自由記述について
問題5の座席移動についての自由記述の具体例を大学生のもの3例, 心のバリアがより大きいと推測される留学生のもの1例, 高校生のもの1例について示す。

<p>大学生1:</p> <p>全く話したことのない人と話すのはとても緊張しました。私はもともと人見知りがあり, 人と話すのが得意ではありません。向こうも緊張していると思ったので, 積極的に話しかけることを心がけました。そうしたら相手も話してくれ, 自らのこころのバリアをといてゆくことの大切さを学びました。</p> <p>大学生2:</p> <p>ふだんは仲の良い友達の隣に座るので, その子たちと対話します。しかし, 席が変わると全く初対面の人と話すため, 気がいながら, まず相手の意見を聞こうという姿勢が強くなりました。また, 様々な意見が出るため自分の視野が広がっていきました。自分が気づかなかった, 思ってもいなかった意見が聞けると「なるほど」「得した!」と思います。やはり, 席を替わって初対面の人と交流するとコミュニケーション能力が育ち, 視野も広がり, いいことだと思いました。</p> <p>大学生3:</p> <p>違う学部の人とも触れ合うことができたので, いろいろな意見や考えを知ることができました。特に理系, 文系では問題に対するアプローチの仕方が違うということに驚きました。私は表面的なこと(事実とか)を主に考えていたのですが, 話した学生は「この子はどんな気持ちなんだろう」とか言っていたので, 「ああ, そういう見方もあるんだな」と視点を広げることができ, 自分の認識も変化したような気がします。その話に耳を傾けるように心がけました。</p>
--

図2. 大学生の意見

大学生（図2）は、最初緊張したが積極的に話すことでお互いに話し合うことができ、自らのバリアを取り除くことの大切さに気づいた人、初対面の人への気づかいとして相手の話に傾聴することで自分の視野を広げた人、文系の人と理系の人の問題に対するアプローチの違いに驚いた人、様々な体験をした人がいた。

留学生（図3）は、初めは自分の日本語能力を気にして、見知らぬ人との話し合いに抵抗があったが、次第に慣れてきて理解を深めることができたと言っていた。

高校生（図4）は、自分の意見を発表することが難しかったが、大学生が優しく、同じ目線で対応してくれて嬉しかった。そして、自分の意見を言わなければ、相手には何も伝わらないことを学んだと書いていた。

全員について、問題5の座席移動についての自由記述からキーワードを抜粋してまとめた。キーワードごとの人数は重複もある。3つの枠組の一部しか書いていない人もいた。なお、心のバリアがより大きいと推測される留学生5人、高校生10人は別にまとめた。

（1）座席移動した最初の印象

大学生は、緊張した27人、不安があった15人、戸惑った10人、抵抗があった7人、新鮮でわくわくした8人、などがあった。

留学生は、驚いた2人、緊張した、不安があった、嫌であったなどがあった。高校生は、緊張した3人、抵抗があった4人、戸惑った2人、男性ばかりで怖かった2人などがあった。

しかし、全員がグループ討論に参加した。

（2）グループ討論で心がけた対処

大学生は、積極的に自分から話しかけた65人、話に耳を傾けた15人、笑顔で話した7人、自己紹介やアイスブレイキングをした6人があった。その他、意見を受け入れた、目を見て話した、身振りを入れた、呼び名を交換した、敬語を使った、レポート用紙を交換して話した、共通の話題を探したなどがあった。高校生に対しては、やさしく話しかけた、受験の話をした、進んでまとめ役をしたなどがあった。

留学生は、自分から話をした、話をよく聞くようにした

最初は席を替わることは嫌でした。留学生なので、自分の日本語能力に自信が持てない、もし間違いをしたら恥ずかしいと思いました。でも、だんだん慣れてきました。誰でも間違える時があるので、自分の力を発揮できたら十分です。この授業で多くの人と出会いました。一番大切なことはお互いに理解することです。これからも積極的に人と交流をしながら理解を深め、いろいろな体験の機会を活かしたい。

図3. 留学生の意見

初対面の人に自分たちの意見を伝えることは難しかった。しかし、優しく大学生がフォローしてくれ、同じ目線で話してくれて嬉しかった。そのため、私は積極的に自分の意見を言うことができた。私は席を替わって話し合いをすることで、言わなければ伝わらない、言ったからこそ伝わるということを学びました。

図4. 高校生の意見

などがあった。高校生は、積極的に自分から話した5人、目を見て明るく話した2人、自己紹介をした2人、あいづちをうったなどがあった。

（3）座席移動をしてのグループ討論で生じた心の変化

大学生は、いろいろな意見・考え方を知ることができた42人でこれが大部分であった。その他に新鮮で刺激的で楽しみであった5人、次第に相手も話してくれて嬉しかった3人、対人的距離が近くなるのを体感した2人、などがあった。

留学生は、いろいろな話が聞けた2人、慣れると理解できるようになったとの意見があった。高校生は、大学生が話を聞いてくれて嬉しかった10人全員、4人はグループ討論が楽しくなったと書いていた。その他には、大学生が「年なんて、1つしか違わないんだから」と自然に接してくれた、話さないとも伝わらないと思った、自己紹介をして次第に近くなり最後には話せるようになったなどがあった。

研究Ⅱ. レポート、「記憶問題」、「引用問題」の成績の関連性について

前回の報告²⁾と比較するために分析結果を前回と同様に示す。

（1）受講生のうち大学生の結果

1) 「引用問題」と「記憶問題」の得点について

「引用問題」と「記憶問題」の得点の間には相関係数 $r = 0.397$ ($p < 0.0001$) の相関があった。

2) 「引用問題」とレポートの得点について

「引用問題」とレポートの得点の間には相関係数 $r = 0.215$ ($p < 0.05$) の相関があった。

3) 「記憶問題」とレポートの得点について

「記憶問題」とレポートの得点の間には相関係数 $r = 0.165$ ($p > 0.05$) で有意な相関はなかった。

4) 「引用問題」得点と性別、在学期間との関連

「引用問題」得点について男性と女性で差はなかった。「引用問題」得点について1回生は 17.3 ± 3.6 、2回生以上は 16.6 ± 4.1 でやや1回生が高かった ($p < 0.05$)。

5) 「記憶問題」得点と性別、在学期間との関連

「記憶問題」得点について男性は 31.9 ± 17.1 、女性は 45.3 ± 12.0 で、明らかに女性で高かった ($p < 0.0001$)。

「記憶問題」得点について1回生は 43.8 ± 14.0 、2回生以上は 36.8 ± 16.0 で1回生の得点が高かった ($p < 0.05$)。

6) レポート得点と性別、在学期間との関連

レポート得点について男性は 17.1 ± 3.2 、女性は 17.5 ± 3.9 で差がなかった。しかし、レポート得点について1回生は 18.4 ± 2.5 、2回生以上は 15.8 ± 4.0 で1回生の得点が高かった ($p < 0.0001$)。

（2）少数例の高校生の結果

「引用問題」と「記憶問題」の得点の間、「引用問題」とレポートの得点の間、「記憶問題」とレポートの得点の間にはすべて相関がなかった。

考 察

本研究は、教養教育の授業で学生の思考を変える、自ら思考することを促す試みの実践である。

研究Ⅰで、受講生が授業中に座席移動して見知らぬ受講生とグループ討論を行い、受講生の中に生じた気持ちの変化を最終テストの最終問題で問うた。この場面の設定に当たっては、受講生たちが何らかの心のバリアを感じ、それに対処する経験をもたせたいという願いがあった。幸い、この授業は複数の学部学生、男女学生、留学生、高校生が受講していた。この多様性を活用して、授業途中で座席移動をして毎回新しい受講生とグループを構成して討論する場を作った。もちろん、授業の最初に受講生に対してこの授業の組み立てを説明した。見知らぬ人とグループを作って話し合うことは、心のバリアが生じる体験である。その中で自分なりの対処を行うことで、バリアフリーのあり方を考える機会として欲しいと座席移動の目的を話した。

座席移動に最初は5分以上かかったが、2回目からは2～3分でできるようになった。グループ討論も、最初は手順を指示したが、次からはそれぞれのグループで工夫して取り組むようになった。レポート用紙にも討論内容が適切に書かれるようになった。

座席移動をしてのグループ討論に関する意見は、最初は緊張して、不安で、戸惑い、抵抗があったというものが大学生、留学生、高校生いずれの記述にもあった。高校生は、男子学生の中に入ったときには怖かったと書いている。しかし、多くの受講生が、話しているうちに打ち解けてきて終わり頃にはいろいろな意見や考えが聞けてよかった、楽しかったと書いている。怖さを感じた高校生も、勇気を出して自分の意見を話すと、大学生が真剣に聞いてくれたと喜んでいて。

これは本授業の2回目に紹介した「こころのバリアフリー宣言」⁴⁾の第5項から第8項にある肯定、受容、出会い、参画に当たることを部分的に体験する機会となったと考える。また愛大学生コンピテンシー⁵⁾のⅢ、多様な人とコミュニケーションする能力を育成することにもつながった。

見知らぬ受講生とのグループ討論で心がけた対処について、大学生は積極的に話しかけたが最も多く、次に話を傾聴したが多かった。その他に、人の意見を受け入れた、自己紹介した、笑顔で話した、目を見て話した、身振りを入れた、うなずきながら聞いた、メモを取って聞いたなどがあった。留学生もほぼ同様で自分から話した、話をよく聞いたと答えた。高校生は、積極的に自分から話しかけたが過半数で、目を見て明るく話した、あいづちをうって話を聞いたなどがあり、大学生と同様であった。

これらのグループ討論への対処について、大学での学び入門⁶⁾の第9章プレゼンテーションの5. コメント・質問

の仕方にある聞き手のマナー：うなずく、笑顔、メモをとる、質問をするなどは、1回生の共通授業の前にすでに修得している受講生がいることがわかった。授業ではその重要性を受講生が自覚し、全員が日常的に実践できるようにすることが課題である。

本研究では課題を出してレポート用紙に自分の意見を書いた後で討論をした。これは構成的(グループ)エンカウンター⁷⁾の考え方である。そこで行われる身体的活動に近いものとしてお互いの似顔絵の作成、言語的活動として自己紹介、討議としては自分の意見を書いたレポート用紙を事前に準備することで討論を進みやすくした。

グループ討論で生じた受講生の心の変化について、大学生は大部分の人がいろいろな意見・考え方を知ることができてよかったと答えた。また、討論の回を重ねるにつれて、話をしているうちに対人的距離が近くなった、新鮮で刺激的で楽しみであったという人もいた。また、面白い意見として文系の人は気持ちで考え、理系の人は事実で考える特徴が見られたと書いた人がいた。留学生もいろいろな意見が聞けてよかった、慣れてくると意見が理解できたと書いていた。高校生は緊張、不安、一部恐怖を感じながらも、積極的に自分の意見を話すと大学生が聞いてくれたことが嬉しかったと書いている。また、自分が心のバリアを崩すと楽しくなったという人もあった。

以上の結果から、座席移動によるグループ討論は、初めは心の緊張、小さなバリアを作り、受講生一人ひとりのバリアへの対処法を引き出し、グループで助け合って討論を行うことで、いろいろな意見や考え方を聞く機会となった。ここに生じた心のバリアは小さなものであるが、今後より広い世界の課題についてもバリアを体験し、理解と対処法を学ぶ機会を提供できればと考えている。さらに、それらの体験を基に自らが体験していないことも、見たり、聞いたり、読んだり、書いたりする中で共感的理解ができる人を育てたいものである。

研究Ⅱでは、前回の研究と同様に各成績について本研究でも検討した。「引用問題」とレポートの得点の間には前回と同様に相関があった。しかし、今回は「引用問題」と「記憶問題」の得点にも相関があった。したがって、今回の結果からはレポートだけでなく「記憶問題」も学生の思考を反映していると考えられた。しかし、レポート、「記憶問題」、「引用問題」の得点の関連については、今後とも検討が必要である。

最後に、授業中に学生の思考を促すために、学生が自分の意見をレポート用紙に書いた後で、見知らぬ人とグループを作って討論することは、緊張感が芽生え、互いの意見交換を促進し、対人関係のバリアを克服する体験の場となる可能性がある。

謝 辞

稿を終えるに当たり、熱心に参加していただきました受講生の皆さん、オムニバス講義を分担していただきました、花熊 暁教員、立入 哉教員に深謝申し上げます。

文 献

- 1) 日本学術会議 日本の展望委員会 知の創造分科会 (2010) 提言 21世紀の教養と教養教育. www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-tsoukai-4.pdf, 1-26.
- 2) 共生社会政策統括官 (2002) 1. 障害者対策に関する新長期計画の策定, 障害者白書 平成14年度版. www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h14hakusho/h14zenbun/text/shh1401_01_1-3.
- 3) 長尾秀夫 (2012) 学生の思考を変える共通教育（一般教養）の授業とは？－授業レポートと試験結果の分析から－. 大学教育実践ジャーナル, 10: 51-53
- 4) 厚生労働省 (2004) 「こころのバリアフリー宣言」～精神疾患を正しく理解し, 新しい一歩を踏み出すための指針～. 心の健康問題の正しい理解のための普及啓発検討会報告書～精神疾患を正しく理解し, 新しい一歩を踏み出すための指針～, www.mhlw.go.jp/shingi/2008/04/dl/s0411-7i.pdf, 5-9.
- 5) 愛媛大学 (2012) 愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～. www.ehime-u.ac.jp/education/news/detail.html?rec=9758.
- 6) 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 (2012) 第9章 プレゼンテーション, 第10章 コミュニケーション・スキルズ. 愛媛大学版 大学での学び入門, 44-48.
- 7) 水谷宗行 (2007) 大学講義科目への構成的グループ・エンカウンターと討論の導入について(3). 京都教育大学実践研究紀要, 7: 103-110.